

---

# 春が来るのを待っている

一月宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春が来るのを待っている

### 【Nコード】

N9710R

### 【作者名】

一月宮

### 【あらすじ】

幻想水滸伝3より、儀式の地に佇むアップルの独白。オリジナルのエピソードが多少含まれています。『幻想水滸伝もの書きさん同盟』に投稿していたものの再録です。

久しぶりねえ。

あなたが人前で、そんな真剣な顔をするなんて。

「じゃあアップルさん。行ってきます」

因縁に決着をつけるのだ、と言ってシーザーはわたしに背を向ける。アルベルトと話をつける覚悟が出来たんだな、と教えられなくても、なんとなく分かった。

ありきたりな説明をぶつけても却ってあの子の気を悪くするだけ。

わたしは言葉を飲み込み、伏し目がちに呟いた。

「気をつけてね」

「分かっていますよ」

意外と軽い返事が届いたことに驚いて思わず口元が緩む。

最後の戦いかも知れないのに。

そう、これで最後。

ヒューゴ君と肩を並べて洞窟内へと歩いていく背中に、わたしはなつかしい匂い漂う、すべての終わりを見た気がした。

「お寒くありませんか。これをどうぞ」

「ありがとう。でも大丈夫よ」

差し出された毛布に首を振り、わたしは微かに白い息を辿ってゼクセン騎士を見やった。

儀式の地は外気と隔離された岩と空洞の場所。

行き場をなくした風達が冷気を連れ込んで戯れるものだから、グラスランド特有の温暖さは微塵も感じない。

土の入口前に立つわたしにも容赦なく冷風が吹きつけてくる。

それでもみな、休まずに戦い続けている。わたしだけが楽しんでいるなんて、許されるわけないわ。

わたしだって戦ってるんですもの。

シーザーの真剣な顔。久しぶりだと思った。  
そしてわたしは、何故だか昔を思い出していた。

+++

シーザー、覚えてるかしら。  
わたしがあなたとアルベルトに出逢ってすぐの頃よ。

シルバーバーグ家から正式に家庭教師を頼まれた初日だったというのに、肝心のあなたは屋敷から忽然といなくなっていて。街に逃げ出したっていつから捜しに行ったのよ。  
そしたら見つけたのは、公園の遊具の傍で、子ども達とケンカしてるあなただった。

「なにしてるのッ」

ちようど一緒に駆けつけた大人に取り押さえられても、あなたの視線がわたしを見つけても、怯まなかった。  
あざだらけの顔で、腕には血が滲んでいて。  
半分泣きべそかいてるような声で、叫んだの。

「ウィリスを下等だなんて言うなっ。こいつは、お前らなんかより

ずっと勇気があつて、優しくて良い奴なんだつ。何が身分だ。お前からみたいな弱いものいじめしか出来ない貴族のほうか、よっぽど薄汚ねえじゃねーかッ」

その瞬間何かに弾かれたような気がして、わたしは言葉を失った。

依然暴れるシーザーのすぐ横に、腕や足にケガをした男の子が俯いて立っている。

ああ、この子がウィリスなんだなと、すぐに察しがついた。

身分を与えられない小間使いの子。着るものも食すものも決められていて、給料さえろくに払われないと聞いた。

シーザー。

あなたは、この子を守ろうとしたのね。

反抗する力も持たない弱い立場の人間を蔑む光景に、我慢できなかつたのね。

「シーザー。やめなさい」

「でもッ…」

「シーザー」

わたしは一瞬、そこにマツシユ先生を見た気がした。いつだって差別を許さなかつた先生。

先生は村八分になった親の子どもさえも快く受け入れて、私達に命

の平等を覚えてくれた。

弱者を守ってこそ軍師だと。

「…帰るのよ」

貴族に手を出したのだから、後々面倒になるのは分かっていた。ただ今はそんなこと、どうでもいい。

太い腕から引き剥がすように小さな手を掴んで、わたしはシーザーを連れて帰った。

涙がこぼれるのを必死にこらえながら。

強い子。

優しい子。

そしてあなたは誰よりも、苦しめられる人々の痛みが分かる子よ。

(シーザー、マッシュ先生のようになりなさい)

何年かかっても良いから。

++++

魔物の断末魔の叫びが洞窟中に響き渡り、同時に地鳴りのような重低音が全体を侵食し始める。

それは戦いの終わりを告げているかのように思えた。

「ここもじきに崩れます。そろそろ避難を……」

「大丈夫よ。帰ってくるわ」

こうして英雄達の帰還を待つ自分が、いつかの頃とダブって見える。あの頃は不安でしょうがなく、心配で心配で、周りの人達を困らせてたっけ。

でも今は余裕があるの。年齢のせいかしら。

変な確信があるものだから、笑顔で待つてられるのよ。

「あの子が立派な軍師になるのを見届けるまで、死ねないわね」

声をかけてきたゼクセン騎士は頭をかいて、いそいそと持ち場へ戻っていった。

天井を支える太い柱にひびが入り、頭上から無数の瓦礫が落ちてくる。

松明は消え、破片が足場を侵し、暗闇の撤収作業は混迷を極めた。

制御者のいなくなった魔物が血肉を求めて押し寄せる。



すると稲光のような閃光が奥から走った瞬間、おびただしい魔物達は、業火の海に吞まれていった。  
ヒューゴくんが、フーバーが、軍曹が。

「アップルさんッ」

ほうら。戻ってきた。

あのしょぼくれた顔は、どうやらうまく丸め込まれたようね。  
どうせアルベルトのことだから、分かりづらい説明を押しつけて、  
本当の目的を教えなかったんでしょ。

でもまあ、いいじゃない。あなたが生きてるんだから。

「お帰りシーザー。さ、行きましょう！」

あなたを待つ未来へ。

行ってらっしゃい。

立派な軍師になって世界中に名が知れ渡るのを、セイカの町で待ってるわ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9710r/>

---

春が来るのを待っている

2011年10月8日02時21分発行